

キム・チュイの『小川』に見られる言語習得と間文化性

関 未玲

要旨

北米に位置し、イギリス連邦加盟国でもあるカナダのなかで、今なおフランス語をただ1つの公用語とするケベック州では、フランス語およびフランス文化を守るために、カナダ政府の推し進める多文化主義政策と一線を画す間文化主義が掲げられている。間文化主義は、様々な文化への尊重を担保しながらも、フランス語に基づく文化形成を重視する動きである。このようなケベックの言語・文化政策に呼応するかのようになり、1980年代以降、移民作家による文学作品が次々と発表されることになる。これらの作品は「移動文学」(écritures migrantes)¹と呼ばれ、ケベックの提唱する間文化主義が示すように、フランス語での執筆を共通項として持ちながらも、様々な出自や文化を持つ移民作家が、新たな視座からケベック社会を見つめ、これを反映させるような文学を生み出すこととなった。本研究報告で取り上げる作家キム・チュイも、ベトナム戦争終結後の1978年、10歳のときに家族とともに祖国を去り、カナダに移住した移民作家である。本報告では、チュイのデビュー作『小川』を取り上げ、主人公ギユエン・アン・ティンが第二の祖国となったカナダのケベック州において、フランス語を習得してゆく過程で改めて母語とも向き合うことになった姿を分析しながら、今後の本研究の展望と併せて、考察を試みている。

キーワード：ケベック、間文化、キム・チュイ、『小川』、フランス語圏文学

はじめに

キム・チュイの作品には、作家自らの人生が色濃く反映された小説が多い。2009年に刊行された*Ru* (『小川』)以来、これまで5冊の本が上梓されているが、いずれも作家自身の半世紀の足跡を凝縮したような作品ばかりである。なかにはベトナム料理の紹介と文学作品との融合を目指した、挑戦的な一冊*Le secret des Vietnamiennes* (『ベトナム女性の秘密』)もあれば、往復書簡を小説に仕立てた共著*À toi* (『あなたへ』)などもある。2009年、41歳にしてデビュー作『小川』を刊行するや、本書はたちまちにして話題となり、RTL-Lire大賞、カナダ総督文学賞、アルシャンボー文学大賞など、数々の賞を総なめにした。2018年には、惜しくも受賞には至らなかったものの、ニュー・アカデミー文学賞にもノミネートされている。本報告書では、チュイのデビュー作となった『小川』を取り上げ、主人公の言語習得を軸に間文化性がどのような形で作品に表れているのか、分析してゆきたい。

ケベックの間文化主義とキム・チュイ作品

『小川』で華々しいデビューを飾った作家キム・チュイの誕生までの道のりは、平坦ではなかった。裁縫師、通訳、弁護士、レストラン経営など多岐にわたる職業を経験した後、閉店をあと数日後に決めたレストランのガランとしたスペースで執筆し始めたのが、初の作品となる『小川』であった²。同様に、ケベックでの新たな生活をスタートさせる以前のチュイの幼少期もまた、過酷なものであった。南ベトナムのサイゴンに生まれたチュイは、ベトナム戦争終結後の混乱で財産を没収され、10歳のときに家族とともにボートピープル

1 「移動文学」という呼称は、ロベール・ベルエ＝オリオル (Robert Berrouët-Oriol) が*Vice Versa* 17号 (1986-1987) 所収「L'effet d'exil」のなかで用いたことがきっかけとなり、広く用いられるようになった。

2 2017年9月、筆者が司会兼インタビュアーとして登壇した国際フランス語教授連盟主催、アンスティチュ・フランセ関西共催トークイベント「キム・チュイと出会う」のなかで、作家自らがその誕生秘話を語ってくれた。

として祖国を去り、マレーシアの難民キャンプを経て命からがらカナダへと移り住む。『小川』の冒頭を飾る、主人公ギュエン・アン・ティンの誕生は、チュイの人生とも重なる。

この世に生を受けたのは、申年の最初の数日に行われた、旧正月のテト攻撃のさなかだった。家の前に仕掛けられた長く連なる雷管が、軽機関銃の音とともに、多重音となって爆破した。

私の生まれたサイゴンが、まるで桜の花びらのように、あるいは2つに引き裂かれたベトナムの町から町へ、村から村へと拡散し、ばらまかれた200万人の兵士の血の色のように、無数に砕けた爆破物の破片で赤く大地を染めた。

ロケット弾の横切る空を彩る火花と大輪の光の陰で、私は生まれたのだが、私の誕生には失われた多くの命に代わるという使命があった。また母の人生の続きを生きるという責務があった。(Thúy, 2009, p. 11, 拙訳)

「桜の花びらのように」、「200万人の兵士の血の色のように」「赤く大地を染めた」南ベトナムのサイゴンで、ギュエン・アン・ティンは生まれながらにして「多くの命に代わる」人生という責務を負いながら、この世に誕生する。作家がボートピープルとしてベトナムを去ったように、ギュエン・アン・ティンもまた、マレーシアでの過酷な難民キャンプを経て、カナダのグランビーからモンリアル [モントリオール] へと移り住む。デビュー作『小川』以降の作品のなかでも、ベトナムは主人公の出自として、ケベック文化を相対化しながら紐解いてゆくための指標となり、いっぽうのケベックもまたベトナムを客観視する際の基軸として描出されている。第二の故郷であるケベックに根付き始めた間文化主義を体現させるごとく、文化と文化のあいだに介在する「狭間」が、チュイ作品のなかでは重要となる。間文化主義を理論面で支えてきた社会学者・歴史学者のジェラルド・ブシャールは、次のように指摘している。

間文化主義はそれに特有というわけではない要素を複数もつ。たとえば以下のようなかなり普及した考えが挙げられる。公用語や法的枠組みや領土的根拠だけではネイションを築くために十分ではなく、アイデンティティ、記憶、帰属に関するものを育む象徴的なものすべてをそこへ加える必要がある。(ブシャール, 2015, p. 55)

北米カナダにおいて圧倒的マイナー言語であるフランス語を死守するために、「アイデンティティ、記憶、帰属」という象徴概念を間文化主義の柱に据え置くことで、歴史の綾のなかで奇跡的にも守られ、受け継がれてきたフランス語の正当性を確保するばかりでなく、フランス語というアイデンティティを起点として、他文化がケベック社会に対して相互作用を行うこともまた、間文化主義は推奨している。ブシャールは続ける。「間文化主義の独自性として挙げるべき二つ目の特性とは、多様性の尊重を推奨しつつも、このモデルが相互作用、交流、歩み寄り、共同体間のイニシアティブを促進するということである」(ブシャール, 2015, p. 62)。

ブシャールの提唱する「間文化主義」は、少数派と多数派という両極端な二面性を併せ持つケベック社会のなかで、そのジレンマのなかでありながら、いかに現実的な解決方法を模索してゆくのか、苦悩の末に出された提言である。しかしそれはいっぽうで、カナダにおいては圧倒的なマイナー言語であるフランス語を基盤としたケベック社会の生き残りを賭けた、新たなパラダイム創設へと開かれるための姿勢でもある。『小川』の主人公ギュエン・アン・ティンは、ケベック社会が移民政策として重要視するフランス語習得のプログラムに参加する。

私にとって最初のカナダ人の先生は、現実の世界へと運ぶ橋をグループで最年少だった私たち7人が、渡れるよう付き添ってくれた。未熟児で生まれた赤ちゃんに対する母親のような繊細さで、私たちが新しい土地に移住できるよう世話してくれた。[...] 彼女が身を屈め、その両手を私の両手の上に置いて、「私はマリー＝フランス。あなたは？」と言うと、爽やかで、軽やかで、かぐわしい香りの雲に包まれて

うっとりとしてしまい、瞬きもせず、理解する必要も抱かずに、一音一音を繰り返した。[…] 一度自宅で、両親にその音のつながりを繰り返してみせた。「私はマリー＝フランス、あなたは？」すると両親は、「名前を変えたのかい？」と尋ねた。自分の現実に戻されたのは、まさにこの瞬間であった[…]。(Thúy, 2009, pp. 19-20, 拙訳)

帰宅後、先生の「爽やかで、軽やかで、かぐわしい香りの雲」が蘇ってくることに嬉々として、耳で聞いた言葉を繰り返していた主人公が、母の一言によって現実に引き戻される。それはギュエン・アン・ティンが外国語の響きとしてまだ内面化することを受け入れる準備が整っていなかった言語を、彼女の言語として受け入れるよう、その覚悟を迫られた瞬間であるともいえる。一人称と二人称がもたらす相互置換という関係性を読み取る努力が、すでに求められるのだということを宣告された瞬間でもある。しかしそれは母の願いそのものであった。「母は、私がフランス語とさらに英語も話せるよう、できるだけ早く勉強して話せるよう、望んでいた。母語は取るに足らないものではなく、不要になっていた」(Thúy, 2009, p. 29, 拙訳)。フランス語を外側から眺めるのではなく、能動的にさらには創造的言語として用いること、しかしこのことは母語の価値を減ずるといことにはつながらない。主人公は新たな言語習得を起点として、共通文化創出の担い手となるよう促すケベックの間文化的姿勢を反映させながら、言語を価値のバロメーターとして据え置くのではなく、ベトナム文化もケベック社会も否定せずに語っている。山出裕子は間文化主義とチュイ作品を次のようにつなげている。

これまでに出版されたケベックの移民文学作品の多くは、移民たちがケベック社会に同化することができず、ケベック人としてのアイデンティティを構築することもできず、ケベックの外側に居場所を見出していく過程が描かれていた。[…] 二〇〇〇年代に入ると、ポストコロニアル理論からグローバリゼーションが論じられるようになった。この時代におけるこうした変遷は、ケベックで「間文化主義」が文化政策として掲げられるようになった背景でもある。この文化政策は「文化と文化の間に生み出される新たな文化の創造」に注目したものであり、そうした背景にあつて、エスニック・マイノリティが、ケベックの移民としてではなく、新たなケベック文化の担い手である「新ケベック人」としてアイデンティティを持つことが可能になったのである。ゆえに、この時代に発表されたキム・チュイの作品は、二〇〇〇年代にかけて変貌を遂げた、ケベックの多(他)文化に対する態度を、克明に描いているものであるといえよう。(山出, 2012, p. 165)

山出が指摘しているように、キム・チュイ作品のなかにあるのは、ベトナムという出自を全面に押し出しながらも、第二の祖国として彼女たちを温かく出迎えてくれたケベック社会を新たに担う主人公の姿である。私たちは次に、主人公ギュエン・アン・ティンがフランス語を習得する過程で相対化していった母語と彼女の関係について見てゆきたい。

言語習得と間文化性

他言語を学習するという経験によって、母語への振り返りが求められることは、誰しも経験があるだろう。他言語学習は母語を否定することなく、これを相対化させる機会をも与えてくれる。ギュエン・アン・ティンは、その後仕事の関係で祖国ベトナムを何度も訪れるが、母語について以下のように語る。

あまりにも早く諦めてしまった母語を、私はもう一度学ぶべきだった。どのみち、本当の意味で完璧に使いこなせるには至らなかったのだから。というのも祖国は、私が生まれたときに2つに分断されていたのだ。ベトナムに戻るまで、南ベトナム出身の私は、北ベトナムの人々が話すのを聞いたことがなかった。南北が再統一されるまで、北ベトナム出身者が南ベトナム出身者の発音を聞いたことがなかったように。ベトナムもまた、カナダのように2つの孤独を抱えている。北ベトナムの言語は、時の政治、

社会、経済の状況のもと進化した。屋根に備えられた軽機関銃で飛行機を打ち落とす様や、グルタミン酸ナトリウムで血液凝固を早める様、サイレンが鳴ったときに避難場所を見つける様を表す言葉を。その間、南ベトナム語は、コカ・コーラの泡が舌に引き起こす感覚を表現する言葉や、南ベトナムの道に潜むスパイや謀反人、共産主義シンパ者を名指すための用語、米軍兵士たちが狂乱する夜から生まれた子供たちを指し示す名前を生み出した。(Thúy, 2009, pp. 88-89, 拙訳)

カナダとりわけケベックの置かれた英系と仏系の対立を、ベトナムの分断と重ねる主人公の視点が、言葉という問題を通して現れる。祖国と第二の故郷の分断が、政治的・社会的・経済的対立だけでなく、いかに言語へと反映されるのか、作家ならではの視点から分析され、描き出されている。主人公ギユエン・アン・ティンは、フランス語を習得する過程で、ケベック社会を相対化し、また祖国を見つめ直す機会を持っただけでなく、両者の問題を言語問題へと導きながら、互いに抱える苦悩を共有し、共感し、共鳴させる文章へと作り変える。両国の直面する問題に「孤独」という言葉を宛がうことで、共通項へと開かれる第三の場を設ける。英語とフランス語、南ベトナムの言葉と北ベトナムの言葉が、価値基準に拠ることもなく、また愛憎に拠ることもなく、恐らくは唯一無二の方法で併記される。他言語習得を創造行為として獲得してゆくギユエン・アン・ティンの姿勢は、まさに『小川』の主題そのものとなっていると考えられるだろう。

まとめに代えて

間文化主義はフランス語をケベック人の共通アイデンティティの要に置くことで、移民文学の方向性を大きく変えてきた。しかしそれは確立した言語を押しつけることではない。間文化主義が目指すもう一つの柱「共同体間のイニシアティブ」の「促進」をも、ケベック文化の新たな担い手である作家に求めるのだ。キム・チュイは極めて21世紀的なテーマを、創造的言語へと昇華させる自らのフランス語によって執筆し、作品のなかで描き切ることのできる稀有な作家であるといえる。その作家を2019年6月、当時在職していた愛知大学に招聘するという幸運に筆者は恵まれた³。幸運と書いたのは、チュイの講演会開催を企画し、作家の承諾が得られた直後に、2018年度ノーベル文学賞の代替賞であるニュー・アカデミー文学賞の候補者として彼女の名前がリストアップされたからである。インターネットを通じて一般からの投票を行った最終候補者4名に、村上春樹とともに彼女の名前が残った。惜しくも受賞には至らなかったが、ノーベル賞の代替賞ノミネートという快挙に、今や世界中から講演会に招かれ、多忙な日々を送っていたチュイが、ノミネート前の約束を果たし、名古屋まで講演会に駆けつけてくれたのだ。「留学フランス語」をテーマとするフランス語総合演習の授業内で、6週間前から『小川』の抜粋と、学生のためにと予め準備してもらった講演原稿の抜粋を読み進めていった。グループワークで訳読を進め、キム・チュイの生い立ちを辿り、彼女の作品に溢れる「時の重み」に胸を打たれ、常に移り行く世界のその流れに私たちが身を置いていることを思い出させる作家の人となり、受講生は思いを馳せた。そして当日ホールを埋め尽くすオーディエンスのなかで講演会は静謐に包まれながら始まった。生き地獄ともいえる壮絶な体験を生きた作家の言葉は重いのだが、負の感情は無く、すべてを前向きに捉える作家の姿に文字通り皆が感動を覚えた。講演時に、「人間には、どんな状況であれ美しさに惹かれるという長所がある」と語った作家の言葉こそ、『小川』を貫く美学を代弁する一言であろう。「どんな状況に置かれていても、人は美に魅惑されてしまうという善良さがある」と作家は言う。祖国と、悲劇と、ときにケベック社会の矛盾を、言葉を極めて描き直すこと、それが作家の辿った言語習得のプロセスであったのだと感じられる。間文化性を体現するキム・チュイ作品のなかに見られる、言語習得の新たな可能性を、ケベック社会の分析も織り込みながら、今後の研究でさらに深めてゆきたいと考えている。

3 愛知大学国際問題研究所主催のキム・チュイ氏講演会は、毎日新聞2019年6月25日付朝刊19面(名古屋版)および毎日新聞ウェブ愛知版にも掲載された。<https://mainichi.jp/articles/20190625/dtl/k23/040/131000c>

参考文献

- Berrouët-Oriol, R. (1986–1987). L'effet d'exil. *Vice Versa*, 17, 20–21.
- Bouchard, G. (2012). *L'interculturalisme*. Montréal: Boréal.
- Defraeye, J. (2013). *Le roman québécois contemporain et sa double structure temporelle*, la thèse présentée à l'Université de Waterloo, sous la direction de François Paré.
- Thúy, K. (2009). *Ru*. Montréal: Libre Expression.
- Thúy, K. (2011). *À toi*. Montréal: Libre Expression.
- Thúy, K. (2017). *Le secret des Vietnamiennes*. Montréal: Trécarré.
- 真田桂子 (2006) 『トランスカルチュラリズムと移動文学』 彩流社.
- 関未玲 (2018) 「キム・チュイ作品に見られる相対化されたオリタリズム」『ケベック研究』 10, 33-47.
- チュイ, キム著, 山出裕子訳 (2012) 『小川』 彩流社.
- ブシャール, ジェラルール著, 小松祐子訳 (2015) 「間文化主義とは何か」『論叢現代語・現代文化』 14, 53-90.
- ブシャール, ジェラルール著, 丹羽卓監訳 (2017) 『間文化主義』 彩流社.
- 山出裕子 (2012) 「ケベックのアジア系女性文学に見られる「間文化主義」とエスニシティの変遷—ベトナム系作家キム・チュイの作品を例に一」『文芸研究』 117, 160-169.